

知の曲がり角と日本の怠惰

・・・大学教育という葦の髄から見た場合・・・

昭和五十一年入学 稲賀 繁 美

1

センター試験の立番をするたびに疑問に思うことがある。自分たちが受験したときからでももう二十年たつというのに、歴史の問題などを見るとほとんど何も変わっていない。といってもミシシッピ川とナイル川の長さ比べの順位が入れ替わったとか、日本史の教科書にかならずと言ってよいほど描かれていた足利尊氏のものと呼称する肖像から、この固有名詞が抹消されたこと、といった個々の記述

を云々しているのではない。たしかに三角関数の複雑な暗記式は消えてしまったし、一時期流行った集合論は世界の趨勢を間違えたことやらで、いまでは跡形もない。だが、そうした受験産業むけの話題とは違った次元で気になるのは、教科書やセンター試験で与えられる課題の枠組みや出題の発想、それに求められる知識が大枠においてほとんど変化せず、なにかひどく硬直しているように見えることなのだ。

まず、知識の内容からだが、最近の入学生たちの世界に関する知識にはひどい欠落がみえる。これは東京大学などではあまりひどくないのかもしれないが、地方大学の場合だと、きちんと日本史、世界史それに地理をそろって学習している学生というのがほとんどいない。理由は簡単で、センター試験でたいがいそのうちひとつを選択すればよいから、受験校育ちの学生たちは、選択した以外の科目については高校程度の常識すらまったく身につけていない。その結果、例えば世界史で鄭成功の話を聞いた学生も、それが近松門左衛門の『国姓爺合戦』の主人公だとは知らないし、その妻が日本人であったことなど、もちろん聞いたこともない。日本史を知っている学生は世界史を知らないし、その逆もまた真。あたかも日本の歴史と世界の歴史とは明治までは無関係に進行したかのごとくで、両者の関係の狭間におおきな知識の欠落ができている。そしてどちらも地理の基礎的知識が皆無ときている。という次第だから、この三者が複雑に入り組んだ地域となるともう致命傷。現代の東南アジアの話などをして、さっぱりチンプンカンプンという事態になる。

さらに深刻なのは、出題の発想がもうここ何十年も改まらないことだ。近現代史が軽視されるのは受験の常識に属し、この部分の知識がほぼ空白というのは今に始まった話ではない。だが手当をせずに放置したせいで、今やこの空白の質量が膨大に膨れ上がってしまった。受験で求められる知識はせいぜい第二次世界大戦までと、一向に新しくならないのに、ふと気付くといま受験をひかえる子供たちは、もはや朝鮮戦争やヴェトナム戦争はもとより、東京オリンピックも大阪万博の記憶すら持ち合わせない。天地開闢以来、日本には洗濯機も冷蔵庫もクーラーもあったと信じているのだから無理もなからうが、第二次世界大戦で日本が香港やシンガポールを占領していたことは無論、二十世紀初頭から日本が朝鮮半島や台湾を併合していたことすら、単なる知識としても知らない学生が何割もいて、それが東南アジア出身の留学生たちと同じ教室に座っている。（例外もあるが概ね）勤勉な留学生たちは、傍らの日本人学友たちが勉強などせぬが当然といった風情でいるのに文化ショックを覚えるようだが、さらには東南アジアの歴史に関してかれらが完全に無知なことにほとんど愕然とすることになる。我ながらちょっと信じがたかったのだが、香港やシンガポール、マニラやバンコックはどこにあるか知っているか、と聞いてみると、地図を見せてもさっぱり要領を得ないほどなのだ。

第三にゆゆしき問題となるのは、ひたすら正解を求め、正解に至る推論の筋道は不問に付すというセンター試験の構想そのものの枠組みである。もとよりこと人文地理や歴史に関しては、＝自然＝な

知識というものは定義からして存在しない。自然国境というのが虚構であるのと同様、史実にしても地名にしても、地理と歴史の枠組みで規定される名詞そのものが、歴史的、文化的な産物でしかないからだ。そのうえ、何を公式の名称と認定するかは、必ず政治的な判断であり、また政治的な意思の行使でもあって、そこにはある特定の価値観が必ず裏打ちされている。

いくつかの常識的な例を挙げておこう。ソ連の崩壊に引き続き、教科書の地図帳を編纂している出版各社が次々に変貌する現実への対応に追われたことは記憶にあたらしいが、これも新しい独立国を国際社会が認知するかどうか、という政治的決定が、主権国家の有無という現実を左右した事例であることを忘れるべきではない。インドネシアの公式見解によれば東ティモール問題はないわけであるし、トルコ政府にとってみればクルド人問題は存在しない。ふだん国境など無関係に羊を追って国境を勝手に越えてきたアラビア半島の遊牧民の立場から見れば、クウェートへのイラクの進行という事態も、それを侵略と解釈した西側の反応にも、ともに本来自分たちの価値観とは相容れない基準で事態が画策され、解釈され、そして一方的に処理された、という象徴的な次元での被害者意識は払いがたかろう。

また、民族自決という場合にいかなる民族を民族として承認するかという問題（クルド人、アイヌ人など）だけでなく、そもそも民族の定義（ユダヤ人、アリア人）そのものを巡る闘争、さらにはいかなる定義（民族と部族の区別など）をこの闘争の舞台に乗せる

かという闘争と、それとは表裏一体だが、何を同じ舞台に乗せずに隠蔽してやり過ごすかの闘争（婚姻法、国籍法、外国人登録法などの現場での事実認定、そのものの根拠）までもが、例えばセンタ―試験という、一見客観的で公認の事実を問うはずの試験の裏に、そうとは気付かれずに、隠されている（この最後の部分について、ここではわざと抽象的な議論しかなかったが、原液の学生諸君！とりわけ法学部生！は、たとえば日本の法律制度で理不尽な障壁となっている具体例をいったい何種類ぐらいを現実に知っているだろうか）。

2

これら最低三つの問題に対する不感症を、好むと好まざるとにかかわらず制度的に生産しているのがセンタ―試験の実態というほかないが、しかし問題はここにとどまらない。ほんらい世界の姿を時間軸と空間軸のなかで立体的に浮かび上がらせるためには、少なくとも世界史と日本史と地理という三つの科目ないし領域が相互に補い合って噛み合わねばならないはずであるし、さらにはそこで公認の史実なり地理的既決事項（たとえば国境の線引き）がそもそもいかなる政治地理的・歴史的背景を背負っているかを知ることこそ大切なはずなのだが、そうした知的訓練は、素朴な「事実」信仰ゆえに高校までの学習ではすっかりなおざりにされ、大学に入學した学生たちは、もはやクイズまがいの断片的な正解と誤答のゲームにしばし興ずる以上の知的好奇心など一向に示さない。世界を立体的に

立ち上げて透視し、そこに織り込まれた無数の矛盾をいろいろな視点から比較しつつ、辛抱強く分析してみるだけの余裕が、もはやこれらには見られない。そんな授業は退屈だし時間の無駄で、なんの役にも立たない。過程は不要、結果だけでよい、と言う。

知識が断片化したのは、はたしてテレビのクイズ番組がわるいのか、それとも正解の理由などいちいち説明できなくてよりつかなくなる視聴者が悪いのか、にわかには判断できないが、一見情報が増えかえるほど垂れ流されながら、それが我々の実際の生活からはどんどん接点を失って、物理的には人畜無害で直接の利害とは無関係な音と色彩の戯れへと還元されつつあるのはどうやら否定できない。精神にたいしてはますます刺激強烈で粗暴な影響を及ぼしながら、世界にたいする感覚麻痺をひたすら助長するような情報に浸った今の世の中、大人だって世の中の仕組みなど碌に弁えずにやっているからこそ、辛うじて狂気に陥らずに済んでいるのだろう。スポーツ番組がおらが村意識を支える代理戦争によるカタルシス装置であるとともに、快い刺激を武器にそれなりに奥の深い情報系の閉じた疑似演劇世界へと人々を招くことによって、実際の政治・経済の現場からひとびとの目逸らせ、そうすることで少なくとも表面的には世界の危機や暴動を回避させるのに貢献していることなど、今日では常識に属するメディアの効能だろう。

こうしたゲームによる疑似世界が現実の世界よりもリアリティーをもつようになってしまうと、うまく行くかうまく行かないかが、正しいか正しくないかを決める基準になりかわる。ゲーム感覚でい

えば、好き嫌いや楽しいか楽しくないかが、正しいか誤りかの判断を支配することになる。ここで第四にゆゆしき問題となるのは、理由を問わずひたすら正解を求めるところに、日本の教育の欠陥を指摘すること自体がもはやどうしようもなく時代遅れな認識となってしまったことである。正しさの基準といったものにたいする人々の感覚そのものが完全に麻痺してきているのとい前後して、そもそも世界に通用する正義などというものがいかにして定義され、認知されうるか、の土台そのものが揺らぎはじめたからである。

3

はたして太平洋戦争ないしは大東亜戦争と呼ばれる戦争が日本による侵略行為だったか否かについて、今年はずいぶんと政治家の「失言」があいつぎ、国際的な波紋を呼んだ。その是非についてここで意見を表明しようというのではない。極東軍事裁判が勝者による報復の面を否定できず、またそこでアジア諸国の立場がなおしかるべく反映されることはなかったという常識を一応押さえたうえで、最低限、理詰めでこの問題の孕む不透明さを指摘するならば、戦争責任否定論者はまず自分たちがなした罪悪の証拠はないと主張し、ついで自分たちだけが侵略の悪事をなしたのではないと居直り、最後に連合国側の汚点を暴くという論法にでるが、第一に主張には論拠がなく、また第二の主張は当事者の悪事を清算しないし、第三の論点は自己の潔白を証明しない。そうであるが以上、この主張が議論として怨恨に曇らされていることは否定できない。そしてまた、

日本の政治家が外国には自分の日本語での発言が伝えられることなどあるまいとの思い込みからか、もっぱら国内で安易に得票に結びつくような無配慮な発言を一向にやめない傾向があるとすれば、そうした政治家を弾劾する代わりに、かれらにそうした二枚舌の使い分けを許してきた国民の政治意識の未熟をこそ摘出すべきではなからうか。

では、こうした二枚舌の横行を許してきた土壌はどこにあるのだろうか。そう問うてみると、むしろ政治家たちやマスコミがこの問題に拘泥する仕方そのものが、既に時代遅れとなった左右の対立という幻想への回帰を夢想させるばかりで、その対幻想ゆえにかえてその奥、ないしは手前にあるはずの事態を隠蔽する結果となっていることに気付く。左右の対立という図式におさまる限りにおいて、どちらの陣営も相手方のイデオロギーを指弾する解釈を繰り返してさえいれば、第三者からそうした図式そのものに安住している日本の特権性を批判される心配もない、という環境に、戦後の日本はあまりにも永いあいだ浸かっていたというほかない。批判的精神が左右の対立図式に還元され、両者の対立によって結局この対立における固着と安定へと貢献してしまった結果、例えば憲法改正を論ずる代わりに、そのことを論ずることを是認する一派と、論ずるのはけしからんとする一派との対立へと議論の水準がずらされて、問題そのものに踏み込むことを忌避するのにまことに都合のよい棚上げの仕組みが、左右の意図せざる共犯関係として成立してきた。それが日本に一時的な経済的覇権を保証したのは皮肉というほかあるま

いし、憲法論議を棚上げにする態度そのものの危険性もこの十年来ようやく意識されるようにはなってきた。だが八九年以来の世界の目に見える激変を経験してしまった今となっては、長期的な軌道修正をするにはもはや取り返しのできない貴重な時間を、この国はいろいろな分野で失ってしまったように思える。それはとりわけ東・東南アジアの将来のなかでの日本の位置付けという問題だろう。

この見せかけの対立に虚偽を嗅ぎとった人々の中には、もちろんアジアとの連帯というスローガンを掲げて活動したグループも幾つも存在する。だがその闘争の一拠点であった成田空港を廃港に追い込んだところで、それで出稼ぎに活路を見いだし、この空港をいやおうなく利用するほかない東南アジアからの外国人労働者たちとの有効な連帯を組織的に勝ち得るわけでは到底あり得ず、象徴的争点としては決定的外れではなかったであろうし、また地域問題としても行政訴訟として十分な根拠をもっていたであろう空港闘争は、結局二十年以上にわたる歲月の中で、根付いていたはずの土地から根を抜かれ、理念倒れの終結へと近づきつつある。だがこうした経緯も、またベ平連運動だって、今日の大学生たちには無縁の知られざる歴史だろうし、この闘争を戦った最も若い闘士たちと同世代で、今や日本を支える中堅と化した世代の多数にとっても、件の事件はすでに忘却の淵へと沈めたい、過去の挫折と失敗の記憶へと変質しつつあるのかも知れない。

そんななかで、今日の日本の学生たちにいったい何を伝えるべきなのか。手前味噌を承知でこんな例もあるというお話しを残る紙面で簡単にさせていただく。集合住宅ならぬ集合授業と陰口をたたかれもするが、複数の講師を招いて毎回とおきの話題を提供してもらう「総合科目」という、今やどの大学にも設けられているらしい梓組みの委員長をつとめるかたわら、ここ四年ほど「世界の人人々とその暮らし」というのの取りまとめ責任者をやっている。昨年までは「世界の国々」という名前だったのだが、ボーダーレスの時代にいかにもそぐわないので、今年から改名した。

ここで自己宣伝になるのをお許しただけ、わが三重大学の文学部は今年で発足して十年を迎えた。社会科学科と文化学科に分かれるなかで、文化学科には既存の哲・史・文とか法・政・経といった分類を横断するかたちで、文化学科にはアジア・オセアニア文化コース、日本文化コース、ヨーロッパ地中海コース、アメリカコースという四つのコースを設け、看板だけはなかなか魅力的で斬新な教育組織を備えている。なにも看板だおれというわけではなくて、このような大講座の組織を日本全国でもずいぶんと早めに構想したおかげで、ここに所属する若手には、地理や人類学といった国立大学既存の学部ではとかく手薄になりがちな分野を含め、意欲的な地域研究者が少なくない(ただし我ら語学教師が足を引っ張っているとの陰口がないわけではないのだが)かれらを中心として、また文化系を引き受けた人文学部と並んでこちらは自然系的一般教育にも携わってきた教育学部とも連携してイニシアティブを取りな

がら、生物資源学部、医学部、工学部というその他三学部及び医療技術短期大学からも幅広く有能な人材を募って授業を運営している。今回の改革がらみでこれを発展させ、全学出動により学生の初期教育を充実させようとする計画も目論んでいる。その一環としての、十指に余る「総合科目」運営のなかでの、ささやかな努力の一齣が「世界の人人々」というわけだ。

そこで目指している授業の眼目はすでに本稿冒頭をお読みいただいた方々にはあまりに明白だろう。東南アジアの現状ひとつ理解するにも、戦後日本のいわゆる戦後賠償に始まる無償援助が実に巧妙にも日本の戦後復興に貢献するばかりで現地の経済的自立をかねて阻害した仕組みであるとか(この文脈で日本興業とラオスのナンゲン・ダム建設のことが思い浮かぶ東大生がどれだけあるか)、この三十年のいわゆる近代化と貨幣経済の浸透がいかにして現地の伝統的な共同体的生活の基盤をひとつまたひとつと容赦なく破壊してきたかとか(インドネシアの場合でいえば、クリフォード・ギアツが六十年代初頭にいった共同収穫における「貧困の分かち合い」がトゥバサンといわれる収穫請け負い業者に肩代わりされて崩壊するや、幼児死亡率の低下もあって大量の農村人口が都市に流出し始めたが、それも八十年代はまだカンボンという同郷寄り合いによる相互扶助によってなんとか最低限の生活を維持できていた。だが、ここ数年、都市再開発の名目で、そうした最低限の「スラム」ならぬ informal sector の生活すら根こそぎにされはじめた現状があり、その裏で formal sector をなすが、円高で日本では spin out した結果

進出している日本企業なのだ、という実態はご存知だろうか。

はたまたそうした都市への多量の人口集中のお陰で発達した廃棄物再利用産業従事者の跳梁跋扈と行政当局との化かし合い（例えばマニラ郊外のスモークーマウンティンのことだ）。ウルグアイやパラグアイといった南米諸国への最大の援助国が日本であることも、

またその援助が何を齎しているのかも知らない日本人学生たちに、無償援助がかえって救いがたい依存意識を植え付けてしまう現状を、例えば一九九一年のポリビアで発生した偽チフス事件などを具体的に縦横に説いてもらう。はてまた、アフリカはザイルの村起こしに従事しているブラック・アフリカ出身の同僚を呼んで、いかにして現地ではコーヒー豆十キロを購入できる価格が日本では缶コーヒー一本に化けてしまうのかを、「バナナと日本人」や「エビと日本人」顔負けの精緻さで分析してもらったり。さらには南アフリカ史を専門とする（日本ではまことに貴重な）講師や、ナミビアで活躍し、ローラーとして運べる水タンクを導入して、現地で井戸からの水汲みを合理化した経験のあるユニセフの派遣員からお話を伺って、アパルトヘイトが決して日本と無縁ではなかったことを悟らされたり（これが具体的に何を意味するかおわかりですか）。

毎回こんな調子だから、開講責任者たる当方にはまことに得難い耳学問、おそらく東京大学にいたのでは接することもできなかったに違いない、切れば血の出る切実で臨場感溢れる話に毎回こちらの血までたぎってくる。一見無縁な毎回の話がいつのまにやら通底しできて、たまさか現代の世界における日本の位置と本来果たすべき

債務と現実の無責任さ、さらには金銭的な援助の莫大さとあまりにも不釣り合いな精神的、倫理的空白とを容赦なくあぶり出しにしている。

5

だがしかし、である。学生たちの反応はというと、必ずしも当方の意思通りとは参らない。「毎回くだらない話が多くて退屈だった」とか、ナミビアの第一線で活躍した人物を講師に招いたはずなのに「南アフリカの現状分析がなかった」とか、東南アジアにおける華僑や華人ネットワークが二世紀の鍵を握ることに関する実に説得的な説明を聞いても、「知らないことばかりで何の話かわからず無駄だったと思う。」といった感想を書き付けてくる学生ばかり。さらには授業を出発点にして、たとえばもよりのZSOやピナツポ地震救援活動をやっていた生協の担当者に電話一本いれるかちょっと話を伺ってレポートをまとめてみよう、といった程度の課題を出してだけで非難轟々。「正解を教えてくださいない授業はひどい」、「授業には出たかったのに、課題ができそうにもないので出席できませんでした。何とかしてほしいと思います」、「課題がむちゃくちゃすぎる。ほかの授業に比べて異常だ」、「冬学期の一時間目はやめてほしいと思います」といった調子で、もちろん何人か熱烈な学生もいるけれど、昨年など三百名以上登録していたのに、合格者はわずか三三名、残るは試験不合格の二名を除き、悉く途中放棄という異常事態となる始末。

理解不能の原因は、理系の学生が多かったことであろうが、要するに学生側には地理や歴史にかんする完璧なる無知と今日の国際情勢へのまったくの無関心（自宅生以外で新聞やニュースに毎日接していると答える学生が30%以下で、読んでも何のことかわからないし、自分には関係ないから、という返答がかえってくる）、そして教官側には専門のしからしむところ、いくら何だってこれくらいは大学生なのだから知っているはずだ、という見込み違いの思い込みと、それが発覚したとたんに、こいつらに教育なんかできんという、一般教育放棄と専門教育への退却が始まってしまう。ほとんど偏差値の最低ラインにある地方大学では、残念ながら専門教育しか経験のない蛸壺思考の教官と、もとよりそんな専門になどまったく興味を示さない一般教育課程の学生との通話はもはやほぼ不可能なのかもしれない。

当然としてもいろいろ反省したいところはあって、例えばこうした学生たちに自主的な調査・研究・発表をも要求する授業を低学年で組織するとすると、一週間に一度という形態の授業ではもはや対応できなくなることは、痛切に感じさせられた。今平均予習時間は五分を切り、半分以上の学生はまったく予習をせず、授業など要求する授業をするほうが犯罪者扱いされる地方大学にあっては、単位取得に苦勞させる様な科目はまっさきに敬遠される。人氣があればあったで、かえってカリスマ的でそれ恐ろしいが、学生による自主的な研究活動に主体をおくゼミと情報を集約的に伝達する目的の講義とが、両者手を取り合って進むためには、現行のような週一度年

間三十回の授業を事実上義務づけている時代遅れの文部省の指導など、そろそろ廃止してもらいたいとの思い、誇張なく切なるものがある。

だがこうした不毛な現状に安住して不満ばかりになっている、という学生・教官双方のありかたこそが問題なのではあるまいか。これはとりわけ人文系統の学問の問題だろうが、教官側でも自分が大学で学んできたそのままの教材や専門がいつのまにか世の中では古色蒼然たる廃物と化していることにも気付かず、その縮小再生産以外なんの見通しもないままの自称研究者が多すぎる。専門の研究ならば古色蒼然たることにこそその価値もありえようが、それが一般教育で通用しないことの責任を学生に求めるのは、世代的な継承に失敗した自らの学問的専門分野そのものの責任を、無責任にも後代に転嫁することではかありえまい。

ときあたかも一般教養とか一般教育といった言葉が文部省用語からは一掃され、三重大学でも全学の「共通教育」という視野から、旧来の教育課程を見直すことになった。だが名称は変えてみても、教官側の意識変革を実現するにはまだまだ長い年月が必要だろうし、教官の意識が変わったところには、またもうひとまわり世代が変わり、ここにながながしく述べたような問題意識そのものもはやどうしようもなく時代遅れになっていることだろう。現代の大学生の立場からみて、ここに拙劣に述べてきたようなことに、いったいどの程度共感してもらえるものか、心もとない。むしろ今こそ、これまた時代遅れの言葉だろうが、こうした大人たちの世界観を批判して、

次の世紀への見取り図を描いてくれる学生の出現に期待したい。

*

すでにこの文章は長きに失していよう。東京大学出版会の『今なぜ民族か』、『知の技法』に負けない本を作れるだけの人材はそろっているとは自負しているし、組織としては駒場よりこっちのほうがはるかに合理的だとすら、いささかの敵愾心を込めて思っているのだが、さていざとなると外に手を貸すことはできても、自前ではまともな教科書も研究所もひとつとして出版できないのが地方大学の悲しさか。そろそろ時効だから構うまいが、母校に復帰しそこなった確信犯としては、トウダイ減ぶべし、『古事記』以来のこの地にこそ幸あれと望まずにはいられない。

(一九九四年十一月二六日)